道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

9月の「白馬トレラン」、楽しんできました♪　カリスマ鏑木毅さんと。

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～ http://www.fairytale.jp/ ～

お洒落なイオンと週末は混雑するパーキング界隈。アルプスに向かうと、三駅とお城♪

モール屋上から美ヶ原が生えていた！ここにカフェと温泉あったら最高だよね！？

北側。右より浅間温泉、信州大学、スタート地点。奥の稲倉峠を越えると我が家♪

今、道と関わる話題で熱い我が松本市。ひとつは9月末にオープンした長野県内最大の「イオンモール松本」。駅から1・5キロと歩いてもいける旧松本カタクラモールの跡地で、美術館や公園や松本城に囲まれた文教地区。狭く曲がった道が多い城下町ゆえに、市民の間では渋滞の不安が頻繁に囁かれていました。普段でも通勤時の渋滞問題を抱えた松本市。20年前に諸用で信州大学に来た時も、お城より印象的だったのが渋滞（その頃に比べると道路整備で緩和されましたが）。地元の人に「イオン行った？」聞くと、ほとんどが「怖くてまだ」。私も「2300台可能な駐車場が90分待ち」「松本ICから市内は大渋滞」「周遊シャトルも停滞」と聞くと、触らぬ神に…、状態。それでも気になって0時ごろに偵察に行くと、さすがにガラガラ。でも、周辺の道に狭さを感じ、ヨーロッパのように町から車を締め出す作戦が脳裏に浮かびました。市では次世代交通政策に本腰を入れるらしく、公共レンタサイクルや、パーク&ライド、周遊バスの充実と、自家用車を減らす方向に向かっています。私は車が大好きだけれど、確かに町の未来を考えると、そっちが正しそう。モールの成果や結果がでるのはまだ先でしょうが、これがきっかけで観光客も市民も店舗も喜ぶ交通システムが完成したらいいな。

もうひとつの話題は、イオンモール完成の翌週に開催された「第一回松本マラソン」。イオンの北側にある松本市総合体育館をスタートして、お城の横（町のど真ん中）を貫いて塩尻北まで南下。折り返しながら、信州まつもと空港の周遊路（広くて快適なジョギングの名所）を辿って再び北上。松本山雅の本拠地アルウィンを3度横目に折り返すこと2回。そして信州スカイパーク陸上競技場でゴール。折り返しラッシュなので地図からは様子が掴めませんでしたが、エントリーは一万人を超え、8611人が快走しました。天候に恵まれたこともあり、口コミでは80点を超える評判大会となりました。「スタート直後や途中の道が狭い」「後半の畑道の向かい風が厳しすぎ」「クネクネがストレス」という意見もありましたが、小さな街ゆえに「途切れることない声援に感動した」「1回目なので覚悟してきたが、どれも素晴らしかった」という声も多くありました。「名所を見せたいが、道が狭い」「街中の道路渋滞対策」と問題多い中で、本当に嬉しくなりました。選手にはもっと色々見て欲しいし、観光もして欲しい。アクセスの点でやや出遅れた感のある松本ですが、実はいいところなんだと教えてあげたい。でも、思いがけずこのふたつの話題に共通点を発見。それは、絶景！　マラソン大会の写真には、どれにもアルプスや美ヶ原の山々が写っていますが、空の下に必ず大きな山塊がある大会は珍しいでしょう。そして、昨日の夕方初めて足を運んだイオンモール。平日とあって渋滞はなく、パーキングもすんなり。賑わっていたモール内は、自転車や歩きで来る人が多いように見えました。若い人も老人も、親子連れもカップルもお一人様も、見回すとなんだかいい光景。新しいからというだけでなく、「町の中にできたしあわせ空間」が感じられました。郊外でも駅前でもなく、不思議な場所に出現したモール、ある意味「商都松本」らしいのかも。そして、友人に屋上駐車場の景色を勧められたので行ってみると、広い屋上には四方の山々が、どっか～ん！あまりに嬉しくて走り回ってしまいました。北には、我が家の裏山（戸谷峰や三才山）、東には美ヶ原、西には乗鞍～常念岳～白馬。松本城はビルに囲まれて見えませんが、ぎゅっと詰まった松本市内が一望できます。この真ん中にランナーの道を通したんだと思うと、なんだか感動。年間500万人が訪れる「三ガク都　松本」。今回の2つの話題は、岳・学・楽の、「楽」を支える道のチカラ・影響・課題・未来をいっぱい考えさせられたのでした。

中央分離帯を挟んでの2列スタート。電柱には緩和材など事故防止にも一工夫。

ゴールまであと1キロの給水地点の折り返し。お山も人も応援隊で～す。

九州の散歩道
日本初の有料道路？「青の洞門」

フリージャーナリスト　湯浅玲子

秋の紅葉シーズンになると、毎年多くの観光客が訪れる大分県の耶馬渓（やばけい）。大分県中津市を流れる山国川の上・中流域にあるエリアで、古代の火山活動によってできた奇岩が連なり、そこに赤や黄色の紅葉が加わって美しい景観を生み出しています。日本新三景のひとつに選ばれており、国の名勝にも指定されています。

耶馬渓は、本耶馬渓・深耶馬渓・裏耶馬渓・奥耶馬渓など、いくつかの渓谷に分かれていて広い範囲に見どころが散らばっています。「耶馬渓」という名称は、江戸時代の学者である頼山陽（らいさんよう）が現地を訪れ、当時の「山国谷」という地名に中国風の文字をあてて、「耶馬渓天下無」と漢詩を詠んだことに由来します。当初は一部の渓谷だけを指していましたが、その後に周辺の渓谷にも「耶馬渓」という名称が使われるようになりました。

今回ご紹介する「青の洞門」は本耶馬渓エリアにある有名スポット。山国川に面してそそり立つ競秀峰をくり抜いたトンネルです。

江戸時代、ここは断崖絶壁に鎖を渡しただけの難所で、多くの通行人が命を落としていました。諸国遍歴の旅の途中で立ち寄った禅海和尚は、その様子を見て「安全に通行できるトンネルを掘ろう」と思い立ち、托鉢勧進によって資金を集め、ノミと槌だけで30年かけてトンネルを掘りました。最終的に開通したのは1763（宝暦13）年でした。

1919（大正8）年に発表された菊池寛の『恩讐の彼方に』は、この史実をもとに書かれた小説です。また大正時代の小学校の教科書にも取り上げられ、「青の洞門」は広く世間に知られるようになります。

ただし、小説では主人公の僧が独力で洞門を掘り続けますが、実際には禅海和尚は集めた資金で雇った石工たちと一緒に掘ったのだそうです。

この話にはさらに後日談があり、洞門の完成後には通行人から通行料を徴収したと伝わります。人4文、牛馬8文だったそうです。資金を集めてプロジェクトを立ち上げ、完成後は資金回収のために通行料を徴収する。まさに現代の道路づくりを思わせる話で、「青の洞門」は日本最古の有料道路ともいわれています。

現在の「青の洞門」は、明治時代に車両が通行できるように道路が拡幅されたため、残念ながら当初の原型はかなり失われています。それでもトンネル内部の一部に、手掘りのノミの跡をはっきりと確認することができます。

（写真提供：大分県）

全長342メートルの「青の洞門」は徒歩でも見学可能

燃えるような紅葉がとにかく美しい耶馬渓エリア

ハッと思いました

10月10日は体育の日。1964年10月10日東京オリンピック開会式を記念して1964年から体育の日として祝日になりました。日本観測史上最も晴れる確率が高い日として10月10日が選ばれました。2000年からは10月の第2月曜日になりました。その後、1972年2月3日に札幌、1998年2月7日に長野で冬季オリンピックが開催されたわけです。そして夏冬合わせて4回目のオリンピックが2020年7月24日に再び東京で開催されます。過去に経験したオリンピックは、それなりに当時の自分の生活などが重なって思い出されます。加えて、オリンピックの意義も明確でした。

しかし今では、なぜ今更オリンピック？あの未曽有の震災、原発事故の直後に・・なぜ？と疑問に思うばかりです。日本国としてやるべき事の優先順位は何でしょう？ね。

思うに、再びオリンピックを誘致した頃よりずっと前から、日本人の優先順位や価値観と言ったものが、変わってしまっていたのでしょう。

印籠フレーズを生み出しして、金儲けに邁進する一部の人たちに踊らされている気がしてなりません。

以前にも書いたかと思いますが、官庁あり企業のオフィスありの東京は震が関界隈。昼時、食事へと出かけた時の事。数十人のサラリーマン（みんな大人です）がスマホを片手にビルを出てじっと立って、手元に集中し大衆迎合型で福祉や健康、子供と老人など反論し難いOです。只々、情けない。

自分なりに、情けない人種に立ち向かい、自身も情けない人種にならないよう昭和のアナログな頭で頑張っていかねばなりません。

世相への不満や意見は尽きることないのでこの位にしときましょう。

ともあれ、日々の交通安全のための優先順位として今一度、「人は右、車は左」、「手をあげて横断歩道を渡りましょう」、「飲んだら乗るな、飲むなら乗るな」、「踏切り、見通しの悪い交差点では、止まって右見て左見て、もう一度右見て」でしょうか。自動運転・安全アシストに寄りかかり過ぎる傾向に不安を覚えます。